
あるところに一人の少女がいました

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるところに一人の少女がいました

【Nコード】

N7123L

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

あるところに少女が一人閉じ込められている。
そこに少年が訪れる。

少女は五感の一つを残したまま、そのほかの感覚は閉じられ・・・
(連載ですが、一話一話は独立しています。すみません)

灯台の少女

そこは小さな漁村。

リュカはその村に住む少年だった。

幼いころに母親を亡くし、今は漁師の父親と二人で暮らしていた。

その村には小高い丘があり、そこに灯台が一つあった。

その灯台は漁業を生業とするその村にとって、いわば命綱の様な物の出入りは制限され、灯台守が一人いた。

しかし、押すなど言われれば押したくなるもの。

入るなど言われれば入りたくなるのも人の性である。

ある日、リュカは好奇心の名の下、灯台守の目を盗んで灯台の中に忍び込んだ。

「あれは何だろう？」

リュカは跳ね踊る心臓を押しつけ、灯台の階段を上がるとそこであるものを見つける。

「これは女の子？」

灯台の最上階で台座に寝かされていたのは少女。

少女は拘束具で台座にしばりつけられており、目をつむっている。

これはもしかして人形だろうか、リュカは怪しんで少女に触れてみる。

そこには確かに血の通った温もりがあった。

大変なものを見つけてしまったのかもしれないとリュカは狼狽する。

あの灯台守がこの少女を監禁しているのだろうか？

誰かにこの事を教えなければいけない。

けど、誰に？

話した相手があの灯台守とグルだったら？

父親は漁に出たまま。

あと数日は帰ってこない。

父親が帰ってくるまで待たないといけないのだろうか。

でも、その間にこの子に何かあったなら。
そんな事をリュカが思案していると、遠くで夕刻を知らせる鐘が鳴った。

すると、物音をたてて台座が動き出した。

リュカが目丸くしている前で、台座は直立する。

そして、緩やかに台座は回り出した。

辺りは光に包まれた。

その強い光にリュカは思わず「うっ」とうめきをあげる。

「これは一体どういう事？」

リュカは光源に対して問いかける。

しかし、返事は返っては来ない。

今まで閉ざされていた少女の瞳から放たれる光。

そうしてその日、リュカは灯台の秘密を知ることになったのだった。

それから数日後の事。

リュカはあの日から足しげく灯台に通っていた。

リュカは少女が起きている時、寝ている時に関わらず沢山話しかけたが、何も反応は無かった。

悪戯心に少女に触れてみた事もあったが、ただリュカが気恥ずかしくなるだけだった。

ただ人形のように前をじっと見て、いつも夜ぐるぐると回るのだ。それでもリュカは灯台に通う事を止めようとはしなかった。

村に同じ年頃の子供がいなかったこともあるのだろう。

リュカにとって少女と一方的であれ、話ができる事は楽しみだったのだ。

そうしてリュカは思うようになる。

このまま少女をここに縛りつけていいものだろうか、と。

あれから父親に少女の事を相談できてはいない。

きっと大人には大人達の取り決めがあるのだろう。

この少女がここからいなくなれば灯台はただの塔になってしまふ。

だから、この少女がここにいる事が大人達には必要なのだ。
リュカには分かっていた。

その少女の存在意義を。

けれどその日、少年は少女をさらう。

村は灯らない灯台に騒然となった。

彼女の瞳は青い。

そして、猫の目のように紡錘状になっていた。

昼の日の光があるうちは彼女の瞳もぼんやりとした明かりだけで、
まぶしくは無い。

「おなか減っている？」

リュカはいつもの一人ぼっちでは無い食事に心躍らせていた。

少女はぼんやりと空を見つめるだけでいつも通り反応は無かったが、
リュカは気にせず昨日の夕食だったクラムチャウダーを温め直す。

「少し熱いよ」

そう言つて、皿に盛つて少女の分と自分の分をテーブルに置いた。

少女は湯気をあげるその物体を不思議そうに見つめていた。

そう言えばこの子は食事とかどうしていたのだろう。

そんな事がリュカの頭をよぎる。

「こつやつて・・・」

リュカはまるで赤子に教える様にスプーンですくつて見せる。

「こつする」

そして、口に入れ、その熱さに身悶えした。

その様子を見ていた少女は真似る様にスプーンを持つ。

うまくすくえないようで、こぼしながら口に入れた。

「えっ?! 熱くないの?」

何事も無いように咀嚼する少女にリュカは驚く。

そして、少女の口元が火傷したように赤くなっているのに気付き、
慌てた。

「こついう時はこつやつて、フーフーして・・・」

リュカは少女のスプーンを奪い、食べさせてやる。

口元からこぼれるクラムチャウダーを拭う。

そんな風に二人が食事していると戸を激しく叩く音がした。

慌てて少女をベッドに追いやって、シーツをかぶせた。

「大変だ！リュカ。お前の親父さんの船と連絡がつかなくなった」
現れたのは灯台守だった。

「全く、灯台が壊れているから漁は控えろって言ってあったのに。
お前の親父さん言う事聞かねえからな。まあ、とにかく心配すんな
や。何とかなる。ただ少し時間かかるとは思うから何かあったら遠
慮なく他の人頼れな」

リュカは灯台守の二カツとした笑顔を直視できずにいた。

言い淀むリュカをおかしく感じた灯台守は気がつく。

「何故食器が二つある？」

「それは・・・」

「失礼するぞ」

躊躇なく、部屋に侵入した灯台守はすぐに少女を見つけた。

「リュカ、何故とは問わん。ただこの子はすぐにでも連れていくぞ」

「ま、待つてよ。その子は何も悪い事はしてないじゃないか？なの
に何であんなところに閉じ込めなくちゃいけないのさ。そんなひど
い事なんですよ」

「じゃあ、お前は自分の父親がどうなってもいいと言うのか？」
何も言い返せなかった。

リュカにとって父親は唯一の肉親であり、大切な人だ。

それを少女と天秤に掛けようなんて事は出来なかった。

少女と父親の二人共を助けたかったが、リュカはどちらも助けるす
べを持たなかった。

そして、

「ごめん、ごめん、ごめんなさい・・・」

そうしてリュカはまた台座に繋がれる少女に謝罪するのだった。

それから幾ばくかの時が流れる。
灯台はまだそこにあり、夜の闇を照らし続けている。
そして、少女もそこに・・・

神殿の少女

その国の中央には大きな神殿があり、連日信心深い人たちが長蛇の列をなしていた。

彼らの目的は神殿にいる巫女様を通して、神様に感謝や要望を伝えるためである。

その列の中にナディという名の少年の姿があった。

ナディは毎日のように列の中にいたが、別段信心深いと言う訳では無かった。

巫女様との面会は昼の鐘が鳴ってから、夕刻の鐘が鳴るまでの間。当然列に並んでいる人間全てが面会できる訳ではない。

昼に整理券を渡し、そして夕刻に新たな整理券をもらう。

ナディはその整理券を売って生計を立てていた。

自ら並んだ方が神様に願いがかないやすいと言う噂もあり、信者の多くは他人に頼らず自分で列に並ぶのだが、商売をしているものはそうはいかない者も多い。

そこでナディのように代わりに並ぶ者がいるのである。

「ちょっと待つてくれよ。十二番だぜ、十二番。今まで俺が持つて来た中で一番若い数字じゃないか。それがいらないうてどういう事だよ、おっさん」

「言葉の通りだよ。いらないものはいらない。偶然一桁の数字が手に入ったんでな。もうそれは用済みじゃ」

「そんなあ。おっさんとこはいつも特別価格で譲ってんじゃん」

「ああ、そうじゃな。お前の所はいつも相場より高めじゃな」

「チツ、なんだよ。もういいよ。もうおっさんとこに売ってやんないからな」

「はいはい。分かったから、もう何処かに行きな。商売の邪魔だ」
ナディは裏口から締め出され、狭い路地に追いやられる。

「よう、ナディ。お前んともだめだったか」

悪態をつくナディの元に現れたのは同じ年格好の少年。

「なんだよ、ハギ。お前、俺の事を笑いに來たのかよ。ここはお前のシマじゃないだろ。とつと失せろ」

「ちげーよ。誰が好き好んでお前のきたねえ顔見に來るかよ」

「だったら何のよ・・・」

ナディは問いかけようとしようとして、その答えを悟る。

「待てよ。さっきお前『お前んとも』って言ったよな。もしかしてお前もだめだったのか？」

「いや、俺じゃねえ。トビーんとこだ」

確かトビーと言えば、固定客を持っていたはずとナディは記憶している。

取引の値段も一定、周期的に何人かの客に整理券を売っていた。

信頼関係さえあるような間柄だ。

それが何故？

ナディは疑問に思わざるを得ない。

「何が起こっているんだ？」

「ああ、トルアキの爺さんの話だと隣国で戦争があつて戦争孤児がこの国に流れ込んでいるらしい」

「あいつらか・・・」

思い返せばそれらしき人間が列に並んでいた。
すす汚れた貧しい格好の子供達。

確か並んでいて日差しにやられて倒れた者もいたような記憶もある。
ナディは悔しそうに拳を掌に叩きつける。

「それで、ここに來たのはイツチョあいつらシメようかって相談か？」

「逆だ。馬鹿。トルアキの爺さんから絶対に関わるなつて伝言だ」

「何で?!このままじゃ商売あがつたりだ。この十二番だつて・・・」

「諦める。これはトルアキの爺さんの言葉だ。奴らは死にさらされ

て生きることには貪欲になっている。それこそ生きるためならば手段など選びはしない」

丁度その時、隣の路地から「泥棒――！」と叫び声が聞こえた。窃盗が死罪になるこの国において、ひったくりの様な小悪党のする盗みはあまりない。

恐らくは今聞こえた泥棒も飢えた孤児の仕業であろう。

「ほら、あんな風にな。このまま治安が悪化するようなら国も動かざるを得ないだろう。ってのがトルアキの爺さんの言い分さ。下手に関わつてとばっちり食いたくねえだろ？」

「でも、この十二番・・・」

「だから、諦めろつて。まあ、たまには『敬謙な信者』らしく巫女様にご挨拶でもしてくればいいじゃねえか」

ひらひらと手を振って去っていくハギ。
ハギの態度からして、恐らくハギ自身はもう整理券を換金できたのだろう。

徒労、そんな言葉が頭に浮かんでナディはばやかずにいられない。

「俺に必要なのは未来の平和より明日のパンだつつの」

結局その日、ナディは昼の鐘が鳴るぎりぎりまで買い手を探したが見つからなかった。

「まあ、今まで散々稼がせてもらつてた訳だし、お礼の一つも行つても文句は言われねえか」

思い返せば今まで一度も巫女様に会った事がなかったとナディは思う。

もしかしたら神殿に一番近い所にいながらもナディは今まで一番信仰から遠い所にいたのかもしれない。

神殿の入口には男と女の門番が一人ずついた。

男の門番に入念に身体検査をされた後、ナディは神殿に入る事が出来た。

細く長い道を抜けると、変な臭いのお香が焚き込められた部屋に出

る。

部屋にはナデイ、そして向かいに女が三人、その間にナデイの身の丈ほどの柵があった。

中央にいる少女が巫女様で、その脇を固める二人の女性は神官らしかった。

少女は真つ白い簡素な服に、手足を鈍く光る鉄の鎖で縛られて、目と口を豪華な布で塞がれていた。

「あれが巫女様か？ひでえな」

「さあ、少年。神に願いを言うがよい」

「いや、そんなこと言われても巫女様があんな状態じゃ話もできねえよ。おばさん、何とかなんねえのかよ」

ヒクリと神官の女の口元がひきつる。

「安心しろ、少年。巫女様の口を開くのは神だけに。その眼に映るのも神だけ。その御手も神のためだけに。ただ巫女様は我等の話を聞き、その言葉を神に伝えてくれる尊い存在なのだ」

「へー、そうなのか。ありがとうよ、お姉さん」

「何で貴方がお姉さんで、私がおばさんなのかしら？」

「あら、実際二つも違うじゃありませんか？」

「二つしか、でしょ」

「やはり三十と二十八の差は大きいと言う事でしょう」

「貴方喧嘩売っているの？」

「いえいえ、滅相も無い」

神官二人が骨肉の争いをしている間にナデイはひょいっと柵を越えて、巫女の元に近寄っていく。

「全く神様つてのは変態だな。こんな女の子を縛って。そんな趣味でもあるのかね。あーあ、鎖の後が赤くなっちまってるよ。おーい、痛くないのかー」

少年はぺちぺちと少女の頬を叩く。

「だめだ。何にも反応ねえや。この布もなんか張り付いてはがせないし。せっかく来たのに、なんだよ、こりゃ」

「おい、少年。何をしてる」

「やべっ、ばれたか。んじゃ、そろそろ俺帰るわ。巫女様、今度気が向いて来た時はちゃんと話そうぜ。もし無理だったらここから連れだっしてやるし」

「待て、誰か！その小僧を捕まえろ！」

「んじゃ、またなー、巫女様ー」

神官の怒声。

走り去っていくナディ。

一瞬にして神殿の中が騒がしくなった。

そして、一人香の焚き込められた部屋に取り残された巫女。

その頬流れる一筋の光。

巫女は涙を流していた。

その日から少女は時折少年の優しい声を思い出し、涙を流す。

そして、その少女が涙を流す姿が神々しいと評判になり、また多くの信者がその神殿を訪れるのであった。

ゴミ山の少女

溢れかえるゴミの山。

あと一年でゴミの埋め立て地は使えなくなつて、新しく埋め立て地候補を作らないとなつた時、政府は大規模なエコロジー政策を執る。差し迫つた危機感に国民も協力的であつた事も功を奏して、見る見るうちに寿命は延びていった。

という話である。

もちろんエコ活動だけでゴミ問題が解決できる訳は無く、これは建前。

実情は違つた。

「よう、新人。初勤務がQ地区なんて、運がねえな。腕とか足とか持つてかれないよう用心して行け」

「え?! Q地区って危ないところなんですか?」

コウは先輩に脅され、怖がっていた。

家が貧しく、片親であつたコウは家計を助けるため中学を卒業すると就職した。

当然不安も多く、がちがちに固まっていた。

そんなコウを見かねて先輩が氣を使ったのだろう。

冗談半分にかかつてみせる。

「おい、あんまり新人脅かすなよ。これから仕事だつて言うのによ」

「悪い悪い、こいつがあんまり緊張してるからさ」

と先輩達が笑い飛ばすのを見て、コウは安堵する。

「良かった。だったら言うほどQ地区は危険じゃないんですね?」

「ああ。確かに他の作業場とは少し違うが特別危険つてことは無いよ」

「言いかえれば重機が走りまわっている他の作業場と変わらないくらいには危険だつてことだ」

「そ、そうですね。確かにどんな作業場でも真剣にやらないと怪我しますもんね」

張り切るコウに自然先輩達は破顔する。

「で、Q地区ってどんなところなんですか？」

「そうだな。Q地区のQはクイーンのQで」

「クイーン？」

「そ。女王様のいる高貴なゴミ山さ」

行っで見れば分かると先輩達は言って詳しくは語らない。

コウは顔に疑問符を付けるばかりだった。

そして、コウ達はQ地区にたどり着く。

「あれがクイーン？」

ゴミ山の中にポツリと小屋が一つ。

その中に薄汚い少女が一人。

もはや服とは言えないボロ切れをまとい、首に犬のように鎖でつながれていた。

目は白く淀み、手足は変形、というよりも退化したような形をしていた。

腹はまるで妊婦のように大きく膨れ上がっていた。

「そ。あれがクイーン」

「人間じゃないですか！何であんなところに・・・」

「あれが人間？違うよ。あれは人間なんかじゃない。すぐに分かる」
そう言っ先輩はにんまり笑う。

「おい。危ねえぞー。そろそろそこどけよー」

重機に乗り込んだ先輩がゴミを少女の前に寄せると、少女はゴミを食べ始めた。

バリバリ、むしゃむしゃと。

そこに金属やビニールの分別は無く。

ただ少女の口の中に消えていく。

まるで大食い選手権でも見ている様だった。

どんどんと量を減らすゴミ。

コウには少女の口の奥がまるでブラックホールのように思えた。

「な？あんなの人間じゃねえだろ？」

確かに人間の規格からは外れている様には思えたが。

「じゃあ、新人。これで散らかったゴミを女王様の前に集めてく
れよ」

そう言つて、先輩はコウに鉄製の熊手を渡す。

「なーに、大丈夫。近付き過ぎなきゃ喰われねえよ」

「く、喰われる？！」

先輩はまた意地悪そうな笑顔を浮かべている。

またからかわれているのだとコウは思ったが、その日女王様に鉄製の熊手を三本献上するという名誉な経験からあながち嘘では無いかもとも思つた。

そして、一月後。

またコウはQ地区の担当になった。

「おい、何であんなところにクイーンがいるんだ？」

「もしかして鎖が切れたのか？それとも自分で食いちぎったのか？」
車での移動中、そのゴミ山には本来いるはずの無いあの少女がいた。
バリゴリと何か固いものを咀嚼していた。

ゴミさえ食べていなければ、その姿に憐れみも浮かんでこようもの
だが、恥も外聞も無くただ貪る姿はおぞましく思えてならない。

「とりあえず事務所に連絡してみるわ」

先輩はその場で携帯を取り出し、事務所に連絡した。

その後、結局総出でクイーンを捕獲する羽目になるのだった。

「おい」

クイーンをひきつれてQ地区に近づいた頃。

従業員の誰かが叫んだ。

「こっちにもクイーンいるぞー！」

従業員達の間で動揺が走った。

コウも他の従業員同様小屋の元に走り、急いだ。

そこには確かに先程まで鎖をつけて引っ張っていたクイーンと寸分も変わらぬ少女がいた。

瞳は白濁し、手足は退化したようで、首には首輪があり、鎖で繋がれている。

そう言えば先程まで引っ張ってきたクイーンには初め首輪が無かった。

やはり別の個体だったのだろう。

「腹が・・・」

コウは小屋の中のクイーンを見て気付く。

「腹がどうした？」

「一ヶ月前、僕が見た時にはそのクイーンの腹が大きかったのに、今は・・・」

しぼんで、くびれまで生んでいる。

「もしかしてあの引っ張ってきたクイーンって、こいつの子供か？」
それは当然浮かんでくる疑問であった。

そして、

「馬鹿な？！だってあいつとこいつじゃ全然変わらないじゃないか？
？例え一ヶ月前に生まれたとして、一ヶ月であんなになるものなのか？」

その疑問も当然出てくるものだった。

しかし、従業員達は気付く。

自分達が人間ではないと蔑みながらも人間の常識に少女を当てはめている事を。

「で、でもこれでゴミの処理速度も倍じゃないか」

「そうだな。そうだよ。いい事じゃないか」

「まあ、こいつらの餌のゴミなんて腐るほどあるんだし、一人や二人増えたってどうってことないよな」

「何なら他の地域のゴミもここで処理できるかもしれないぜ」

それらは従業員達の中で自然発生的に出てきた意見だった。

皆が皆、乾いた笑いの中で不可解な事から目をそらせ、自分を納得させようとしていた。

その中でコウだけが一人思い悩んでいた。

コウにはあった。

もしかしたらこのまま世界がこの少女達に食いつくされてしまうのではないだろうかという漠然とした不安感が。

夜陰。

あれから焼却施設の性能の向上という理由でまたそのゴミの埋め立て地の寿命は伸びた。

他の地域からのゴミの受け入れを本格的に考えるほどに、彼女達の食欲は旺盛だった。

人が生活していれば当然ゴミは出てくる。

それは時として他の生物の生命を奪うほどに、雑多に、大量に。

まるでその業を食らいつくすように少女達はゴミを食らう。

そして、また片方のクイーンの腹が大きくなった。

『あいつら単一生殖できるのか？』

『単一生殖？なんだそりや？』

『あいつの父親いないんじゃないかって話だ。だって、誰もあんな化け物を相手しようと考えないだろ？』

『違いねえ。けど、もしいたら襲ってる内に食われて、もう命ないかもな』

『死人が出たって話は聞かないから、やっぱり・・・』

コウはそんな先輩達の世間話がひどく気になった。

しばらく胸の内にもやもやとした思いを抱えたままだったが、ようやくコウはその答えを手にする。

その手には鉄パイプが握られていた。

（孕んでない方のクイーンを処理しよう。もしあの腹の大きくなっただけが孕んでいるのが理由で無いにしても、それは元の状態に戻るだけ。問題ない。もしまた子が生まれて二人になったら、腹が膨ら

んだ時にまた同じようにすればいい)

そして、Q地区へ。

もう彼女達の口元にゴミを集める者は無い。

眠っているのか分からないが、彼女達の瞼は閉じてしまっている。

「あれか」

コウの見つめる先には少女が一人。

コウには何かをいじめて楽しむ趣味など無い。

どちらかというとその感情は正義感に近かった。

世界の危機、と言うとまるでおままごとのようだが、コウにはそう感じてとれた。

もし実際に危機になるとしてもそれはずっと先の事であり、その時その問題を片づけるのはコウの役目ではない。

もしかしたらそんな大事にならないかもしれない。

それでもコウは。

手にしていた鉄パイプを出来るだけ長く持ち、出来るだけ近付かないでもよいようにした。

鎖の長さや、位置を確認して、コウは振りかぶる。

鈍い音がした。

少女は動かない。

だが、コウは近付いて少女の死亡を確認する訳にもいかず、何度か殴り続けた。

(人を殺すこんな感じなのかな)

何となしにコウは思う。

コウはグチャグチャになった少女の口元に鉄パイプをあて、彼女が食事をするかを確認する。

動かなかった。

カラランと鉄パイプを投げ捨て、コウは一仕事終えた。

思いため息を吐き捨てて、その場を立ち去ろうとした時。がりり。

鋭い痛みがコウの右足首を襲った。

コウの足元には少女が一人。

その瞳は白く淀み、手足は退化したように縮こまり、その首には首は無く、鎖にも繋がれてはいない。

コウは小屋に目をやる。

そこには腹の大きなクイーン。

こいつじゃない。

そして、コウが手を下したグチャグチャの少女。

こいつでもない。

（もしかして双子だったのか？！）

彼女達は動きが緩慢ですぐに逃げる事が出来る。

何処から現れたのかも分からない新しい少女をおいて、コウは逃げだす。

食いちぎられた足首からはだらだらと血が流れ、体を引きずりながらコウは逃げる。

頭がふらふらとする。

痛みが襲い、顔をしかめる。

そして、コウは倒れる。

薄れいく意識の中でコウは聞いた。

バリバリぐしゃぐしゃという咀嚼音。

それは一つでは無く、ゴミ山のいたるところから聞こえていた。

闇は深く、その正体を確認する事は出来ない。

コウの視界はだんだんと夜の闇ではない闇が覆い、あまり見えなくなる。

そして、最後に見る。

コウの目の前には少女が一人。

本の中の少女

異人館通りを南に下り、センター街、中華街を抜け、美術館と海の間の通りにその建物はある。

白漆喰の壁に紫の煉瓦の屋根。

ビル群が立ち並ぶ中で、その建物だけが浮いて見えた。

建物の中に入ると正面に雑貨屋が入っており、入ってすぐのところにエレベーターがある。

一人の少年がその建物に、そのエレベーターの中に入ってしまった。

少年はエレベーターの扉を閉め、一から三のボタンを押さずにカバンの中から何やら取り出す。

取り出したのは図書券だった。

ラミネート加工されたその図書券をボタンを押す所にかざすと、赤い光が放たれた。

ばかりとふたが開き、B1のボタンが現れる。

少年は迷うことなく、そのボタンを押した。

ふわりとした浮遊感を覚えながら、少年は図書券をカバンの中にしまうのだった。

エレベーターが止まる。

そこには紙とインクの臭いが充満していて、薄暗い。

湿度は無く、恐らくは本にとって最適の環境を保っているのだろう。奥では店主らしき老人がテレビをぼんやり見ながら、茶をすすっていた。

少年はチラリと店主を伺い見るが、店主の方は少年を気にする様子はない。

少年は本をあさり始めた。

背表紙を指でなぞり、目的の本を探している様だった。

その本屋には一種類の本しか置かれていない。

全ての本にハードカバーが付いており、そして背表紙に名前が書い

である。

色は様々であるが、似通ったその本の中から目的の物を探すのは至難の業かと思われた。

二時間後、ようやく少年は目的の本にたどり着く。
ふらふらとしながらも少年はその背表紙の名を見た途端、正気に戻る。

『ユナ』

そう背表紙に書かれてあった。

愛しき少女の名に少年は打ち震え、本を開いた。

強盗は三人だった。

一人は家の中を物色している。

一人は隣の部屋で母を犯している。

そして、もう一人は目の前にいた。

血まみれで動かなくなった父を見つめ、笑っていた。

私も父と同じように殺されるのだろうか？

それとも母と同じように犯されるのだろうか？

声もあげられず、体は震えるばかりで言う事を聞かない。

足首を掴まれた。

父の血でぬるぬるとした手は熱を持ち、這いずる感触は拒む事を許さず、私はそのまま・・・

少年は本を閉じた。

間違いない、彼女のだと少年は確信する。

そして、本をカバーの中に仕舞い、店主の元へ持っていく。

「これを」

声をかけられ、店主は湯呑を置いた。

値札の無い本を眼鏡をくつとあげて、覗き見る。

「二千万だ」

「二千万？・・・冗談だろ・・・」

「冗談なんかじゃない。君もここに來たのならこの本が何なのか分かつているのだろう？それぐらいの価値があると言っても不思議じゃないだろう、君にとっては。むしろ二千万じゃ安いくらいだ」
足元を見らえている。

そうは思っても確かに少年にとってその本は絶対に必要なものだ。しかし、少年に店主の言うような大金は無い。

頼るべき相手が脳裏をよぎり、逡巡する。

それでも背に腹はかえられない。

「本当に二千万でこの本を譲ってくれるんだろうな？」

「当然だ。商売だからな」

「そうか・・・だったら金は必ず用意するから、それまで誰にもこの本を売らないでくれ」

「それは出来ないな。もしもつと高値で買ってくれるお客様がいたら・・・」

「売らないでくれ！絶対にだ！」

少年の剣幕に店主は肩をすくめて、「分かったよ」と返事をした。そして、少年は気を荒げながら、その店を後にするのだった。

男の前に少女が一人。

彼女は何処を見るでもなく、ぼんやりと虚空を見つめていた。

男がどんなに熱い視線を送ろうとも彼女は何も反応しない。

対面し、座っているだけで男の心臓は早鐘の様に打つというのに。

報われぬ思いが渦を巻き、男の心の中をかき乱す。

その柔らかい唇はどんな味がするのだろうか？

それを確かめるのは出来ない約束であった。

何をするにしても三人で、それが交わされた約束。

それが男の背負うべき業であった。

男に許された事は少ない。

けれど、それでも男は彼女を愛さずにはいられない。

男は彼女の頬に手を触れる。

すると彼女は微笑むのだった。

それが心無くした彼女の唯一の反応だった。

「何をしている！」

「何も・・・何もやましい事などしていない」

「当然だ。そんなことしていたら俺が兄貴を殺している」

実の血の分けた弟から嫉妬に彩られた瞳で睨まれるのは辛い。

しかし、兄弟であるが故か、兄も時折同じような瞳で弟を見つめる事がある事も良く知っている。

「ただいま、ユナ」

そう言つて少年は少女の頬に触れる。

すると今度は少年の方を向いて、微笑むのだった。

複雑な心境で少年の兄はその様子を見ていた。

「早かったな。学校は今日は午前中で終わりだったのか？」

「いや、サボった」

「おい、サボったって・・・」

「サボつて、ユナの記憶を探していた」

「そんなもの探したつて見つかるもんでもないだろ。この間二人でユナが正気に戻るまで我慢しようつて確認し合つたところだろうが、それなのに・・・」

「あつたよ。ユナの記憶。本の中にあつた」

突飛なセリフだ。

頭がおかしくなったのだろうかと思つてもおかしくない。

けれど、兄は弟に何も言えなかった。

「だから、ここでいくら待つてもユナは戻つてこない」

「・・・何処でその本を？」

「美術館を南に下つた所にある秘密の地下の本屋・・・なあ、ここまで言つたらわかるよな。一体兄貴は何を知つてるんだ？」

「教えてくれ」とせがむ弟に兄はどうしたものかと逡巡する。

真実を語れば、きっと彼は兄を許しはしないだろう。

しかし、このまま黙っている事も出来ない。

「・・・俺がユナの記憶を奪って、本の中に閉じ込めた」
呆気にとられた少年の顔。

けれど、すぐにその顔は鬼の形相に変わる。
握りしめられた拳は兄の頬をえぐった。

「何で！そんな事を・・・」

「仕方ないだろ！お前はユナにおばさんみたいに死ねというのか！」
「それは・・・」

少年は自ら命を絶ったユナの母親の事を思い、閉口した。

「あのままじゃユナ、絶対おばさんの後を追っていた」

兄は口の端が切れ、そこから流れる血を手の甲で拭う。

「俺だっけしてたくてしたんじゃない。でも、ユナを失いたくなかった」

兄の気持ちは分かる。

しかし、胸の中のわだかまりは消えない。

「じゃあ、兄貴はユナを元に戻せるんだな」

「・・・出来る・・・けど、したくない」

「何で？！兄貴はユナがこのままの状態でいいっていうのかよ！」

「死ぬよりましだ」

「何で決めつけるんだ。死なないかもしれないだろ。いや、俺が絶対そんなことさせない！」

兄は弟を羨ましく思う。

「俺がユナの傍にずっといる。どんなに苦しくてもずっと傍に。どんなにつらい過去だって、ユナが克服するまで俺が支え続ける」

「・・・たとえ記憶が戻ってもお前を選ぶとは限らない。拒絶されても尚、お前はユナの傍にいるつもりなのか？」

「それはユナが俺じゃなく兄貴を選ぶってことかよ？」

「いや、どちらも拒絶されるかもしれない。それでもお前は・・・」

「傍にいる！俺はユナを愛している！」

ただ真っ直ぐな思い。

「愛しているからと言って、思いが返ってくるとは限らない」

「それでも、俺は・・・」

「それはただの押し付けじゃないのか？」

「でも！愛しているんだ、俺は！」

俺だって、と心の中で呟き、兄は少女を見る。

無表情に虚空を見つめる。

まるで人形の様だ。

「・・・分かった。ユナの記憶を戻そう。あそこの店主は知り合いだから、俺が何とかしよう」

「兄貴」

「でも、覚悟しておけよ。最悪の結末も」

少年は神妙にうなづく。

そして、兄は少女の頬に触れる。

少女はただ微笑む。

もうこの笑顔すら見られなくなってしまうかもしれない。

そう思うと、彼らの心は切なく軋むのである。

病室の少女

不幸な少女がいた。

不運にも事故に遭い、植物状態になってしまったのだ。

「もう起きても大丈夫なのかい？アズサ」

「うん。大丈夫よ。もうだいぶ元気になったから」

少女は花束を持つ少年にっこりと微笑む。

「いい香り。なんていう花なの？」

「さあ？僕は花には詳しくないから。ただお花屋さんにお見舞い用に見繕ってもらっただけだから」

「そう」

少年が花瓶に花を行けようとすると「ちょっと待って」と少女に止められた。

「こういう切り花はこう斜めにハサミを入れとくと、長持ちするのよ」

「へえ、詳しいんだね」

「別に。一般常識でしょ」

「悪かったね。一般常識なくて」

少し拗ねた風な少年を見て、また少女は笑む。

「でも、長持ちさせちゃいけないんじゃない？病院に長くいるからってことになるから」

「さあ？それはどうだったかしら？」

少女は引き出しからハサミを取り出し、茎を切っていく。そして、花瓶に生けた。

「きれいだね」

「私が？それとも花が？」

「どっちも」

「そう言う時は私がっていうんじゃないの？」

「僕は嘘がつけないから」

意地悪そうに少年は肩をすくめて見せる。

「ねえ、またお願いしていい？」

少女が取り出したのは真っ白な絵本。

「だめ？」

「だめじゃないけど」

「子供っぽい？」

「うん。確かに子供っぽいかな。でも、そんな所も含めてアズサが好きだよ」

「ばか」

そう言いながら、少女はベッドで佇まいを整え、目をつむるのであった。

少年はその様子を見ながら、真っ白な絵本に手をかける。

何も書かれていないそのページに少年が指を這わせると、文字が、絵が浮かび出してくる。

そして、言葉を紡ぐと、世界は広がった。

少女の目の前には海が、山が、空が、お城やいろんなお店が現れる。そこでは野を駆けることもでき、ダンスを踊ったり、空をも飛べる。広がる世界は自由だった。

「ねえ・・・」

少女は少年の名を呼ぼうとして、逡巡する。

（そう言えば、まだ名前を決めてなかった）

思案し、いくつかの候補が出た。

「リヨウ？」

「ん、何？」

結局あてがった名は初恋の人の名だった。

その名を呼べば、淡い思い出がよみがえり、心の奥が落ち着きなくそわそわしている。

「好きだよ」

「うん。僕も」

そして、少年は少女の思い通り、とびきりの笑顔を見せるのであった。

その病室には花が飾られていた。

そして、少女はただ幻想の中で幸福な夢を見ている。

「アズサ」

声をかけても反応は無い。

ただ少年は少女の動かない手を握るのであった。

病室の少女（後書き）

お疲れさまでした。

これでこのお話たちはおしまいです。

ここまで読んでくださった皆さまに感謝と謝罪を。
ありがとうございました。

すみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7123/>

あるところに一人の少女がいました

2010年10月13日20時22分発行